

通常、多くの読書案内は、書籍の紹介が中心かと思いますが、このリストは政府や地方自治体の報告書や著名な研究報告なども含めて、更に深く学びたい方へ向けての幅広い内容を対象とした読書案内となっています。順番に読む必要はなく興味のあるものから読んでいただければよいと思いますが、ここでは本文の流れに沿って紹介しています。

教育データについて.....

- 「教育データの利活用に関する有識者会議」論点整理（中間まとめ）、2021年。
URL：https://www.mext.go.jp/content/20210331-mxt_syoto01-000013887_1.pdf
- 「教育データ利活用ロードマップ」、2022年。
URL：https://www.digital.go.jp/assets/contents/node/information/field_ref_resources/0305c503-27f0-4b2c-b477-156c83fdc852/20220107_news_education_01.pdf
- 「教育データの利活用に係る留意事項（第1版）」、2023年。
URL：https://www.mext.go.jp/content/20230908-mxt_syoto01-000028144_1.pdf

上記の3つは、いずれも政府もしくは政府が設置した会議体の報告書であり、国がどのように教育データというものを捉えようとしているかを知る上で、重要な報告書となっています。それぞれについて、概要もまとめられているので、まずはそこから目を通すのもよいでしょう。

教育効果の先行的な分析について.....

- ジェームズ・J・ヘックマン『幼児教育の経済学』（古草秀子訳）、東洋経済新報社、2015年。
- 北條雅一『少人数学級の経済学——エビデンスに基づく教育政策へのビジョン』慶應義塾大学出版会、2023年。

上記の本は、「ペリー幼稚園プログラム」や「STAR プロジェクト」など、先行的に実施された教育効果の分析についてまとめた本です。教育に係るEBPM関連のプログラム・プロジェクトとしては必ずこの2つが出てきますので、知っておくことは有用でしょう。

- ジョン・ハッティ、グレゴリー・イエーツ『教育効果を可視化する学習科学』、北大路書房、2020年。

この本は、学習科学の観点から、過去の研究をメタ分析して、31のテーマで、どのような学習が学習効果をもたらすかを分析したものです。

教育効果の測定について.....

- 別府正彦『「新テスト」の学力測定方法を知る IRT 入門——基礎知識からテスト開発・分析までの話』、河合出版、2015 年。
- 豊田秀樹『項目反応理論 事例編——新しい心理テストの構成法』、朝倉書店、2002 年。

いずれも、IRT（項目反応理論）についての本です。1冊目は入門書であり、2冊目は専門的に IRT について説明しています。

- 小塩真司編著『非認知能力——概念・測定と教育の可能性』、北大路書房、2021 年。

非認知能力とは何かについて、心理学の知見から論じている本です。誠実性、グリット、好奇心、自己制御、楽観性、レジリエンス、マインドフルネスなど関連する 15 の心理特性を取りあげています。非認知能力を広く深く知ることができる一冊です。

- 堀洋道監修『心理測定尺度集（I～VI）』、サイエンス社。

児童生徒の質問紙における調査項目を考える上で、大変参考となる調査項目集です。I から VI までの 6 冊が出版されています。専門家のアドバイスを聞きながら、参考にすることをお勧めします。

- アンジェラ・ダックワース『やり抜く力——人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける』（神崎朗子訳）、ダイヤモンド社、2016 年。

非認知能力の中でも、「やり抜く力（GRIT／グリット）」に焦点を当てた本です。

国際的な学力・学習状況調査について.....

- PISA（OECD 生徒の学習到達度調査）
- TIMSS（IEA 国際数学・理科教育動向調査）
- SSES（社会情動的スキル調査）：経済協力開発機構（OECD）編著『社会情動的スキルの国際比較——教科の学びを超える力（第 1 回 OECD 社会情動的スキル調査(SSES)報告書）』（矢倉美登里・松尾恵子訳）、明石書店、2022 年。
- OECD グローバル・ティーチング・インサイト

PISA は OECD が、TIMSS は IEA が、それぞれ実施してきた国際的な学力・学習状況調査です。国立教育政策研究所の HP が最も充実しており、そこに載っている報告書を読むのが一番わかりやすいでしょう。

SSES は、いわゆる非認知能力（社会情動的スキル）に着目した調査で既に第1回の調査結果が公表されています。

グローバル・ティーチング・インサイトでは、授業観察における評価項目が参考になるでしょう。

地方自治体における教育効果の測定・分析・活用について……………

- 埼玉県教育局「埼玉県学力・学習状況調査のデータを活用した効果的な指導方法に関する分析研究 調査報告書」

URL：<https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/52863/houkokusyo29-hp.pdf>

- 第4期横浜市教育振興基本計画

URL：<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kosodate-kyoiku/kyoiku/plankoho/plan/kyoikuplan/4th-kyoikuplan.html>

埼玉県は、県の学力・学習状況調査についての分析結果を県のHPで公表しています。特に2017年度の分析は、その後の分析の基礎となるものであり、まず目を通すとよいでしょう。児童生徒への質問紙調査の調査項目についても、かなりの内容が掲載されています。

横浜市の第4期教育振興基本計画は、市の学力調査の分析として、学力の高い低いと学力の伸びは別であることを示した分かりやすい例です。

教育経済学・教育社会について……………

- 中室牧子『「学力」の経済学』、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2015年。

日本語で書かれた教育経済学の書籍です。「データ」に基づき教育を経済学的手法で分析する教育経済学に関して、子育てをテーマに、教育の世界ではない方々にも、読みやすく書かれています。

- 松塚ゆかり『概説 教育経済学』、日本評論社、2022年。

上に挙げた『「学力」の経済学』とは異なり、こちらは専門書です。人的資本理論の概要や教育経済学の歴史的背景、理論研究や実証研究を紹介しています。

- 中村高康・松岡亮二編著『現場で使える教育社会学——教職のための「教育格差」入門』、ミネルヴァ書房、2021年。

教育現場に立つ教育関係者が読むことを想定して執筆された教育社会学の本です。学術的な教科書ではなく、あくまで実践に役立てることに焦点を当てた書籍です。

EBPM について……………

- 大竹文雄・内山融・小林庸平編著『EBPM エビデンスに基づく政策形成の導入と実践』、日本経済新聞出版、2022 年。

EBPM の基本的な概念・手法に加え、米国・英国・日本における EBPM の具体的な実践事例を解説した一冊です。この本は、RIETI（独立行政法人経済産業研究所）が、2017 年から 6 年にわたり進めてきた EBPM 研究の成果をまとめたものになります。RIETI は 2022 年に、EBPM 研究の拠点となる EBPM センターを創設しました。そこでの取組も注目です。

- 大橋弘編『EBPM の経済学——エビデンスを重視した政策立案』、東京大学出版会、2020 年。

経済学者と現役の政策立案者が、EBPM に求められる取り組みを 6 つの政策分野において論じています。

統計学・因果推論について……………

- 伊藤公一朗『データ分析の力 因果関係に迫る思考法』、光文社、2017 年。
- 中室牧子・津川友介『「原因と結果」の経済学——データから真実を見抜く思考法』、ダイヤモンド社、2017 年。

上記の 2 冊は因果推論やデータ分析の入門的な内容を分かりやすく解説した一般向け書籍です。因果推論とは何かを概念として理解するのにおすすめです。

- レイチェル・グレナスター、マイケル・クレーマー、エステル・デュフロ『政策評価のための因果関係の見つけ方——ランダム化比較試験入門』（小林庸平監訳・解説、石川貴之・井上領介・名取淳訳）、日本評論社、2019 年。

ランダム化比較試験（RCT）を用いた政策評価の方法について解説した一冊です。3 名の著者のうち 2 名は、経済学研究に RCT を本格的に導入した第一人者として 2019 年にノーベル経済学賞を受賞しています。政策と結果との因果関係を解明する強力なツールである RCT の手法の解説から事例までコンパクトにまとめられています。教育分野ではまだまだ導入がされていない RCT ですが、深く理解するには最適の一冊です。フィールド実験を活用し EBPM を推進するプロセスにつき詳細に解説した巻末の訳者解説も併せて是非お読みください。

- 小島寛之『統計学入門——完全独習』、ダイヤモンド社、2006年。
- 白砂堤津耶『例題で学ぶ 初歩からの統計学 [第2版]』、日本評論社、2015年。

『統計学入門——完全独習』は中学数学の知識で読むことができるため学習へのハードルが比較的安く取り組みやすいでしょう。『例題で学ぶ 初歩からの統計学 [第2版]』は少し数学のレベルが上がりますが、基礎的な統計学の内容を例題に沿って学習するため身に付きやすいです。上記の2冊以外にも統計学の入門書は数多く出版されていますので、自分の理解度、ニーズにあったものを選ぶことをおすすめします。

- 西山慶彦・新谷元嗣・川口大司・奥井亮『計量経済学』、有斐閣、2019年。

計量経済学の基礎から応用まで網羅したテキストです。確率・統計の基礎、回帰分析、パネルデータ分析、準実験的手法、時系列分析などがバランスよくまとめられていて、初学者から上級者まで使えるテキストです。